

# 吉野作造年譜

太田雅夫

一、吉野作造は、政治学者であると同時に啓蒙思想家であった。それゆえ各種の新聞・雑誌に筆を振るい、また多くの講演・演説活動があった。この年譜は、キリスト者吉野作造の政治学面に留意しながら、これらのものをできるだけとり上げ、年譜の流れに含めて作成し、吉野作造の全体像がうかがえるようにした。

一、著書・新聞・雑誌は、すべて『』で記した。吉野作造の著書は、全部掲載したが、新聞・雑誌類に執筆した論文・随筆は、約一五〇〇点という大きな数にのぼるので、とくに重要と思われるもののみにとどめた。講演・演説については、判明したものはすべて収録した。

明治一一年（一八七八） 一歳

一月二十九日、宮城県志田郡古川町字大柿九六番地に生まれた。戸籍名は作蔵。この蔵の文字は家系とつながるものである。父吉野年藏三二歳、母こう二五歳の長男。すでに二人の姉があり、作造のあとに九人の弟妹がつぎつぎと生まれた。古川町はかつての仙台藩にぞくし、陸羽街道にそった人口一内外の農村都市で、大崎広地と

よばれ、仙台六〇余万石の産米の中心地であった。戦国時代の大崎氏の臣古川刑部がここに城をかまえたところから古川町の名が生まれ、吉野がのちに「古川学人」のペンネームをもちいたのも故郷に対する思慕の情のあらわれであった。吉野家は、大崎氏の一族で、代々隣郡の栗原郡の郷士であったが、先祖が古川町に来て「吉野屋」というのれんを買ったという。曾祖父嘉蔵は、駄菓子屋をいとなんでいたが、慶応元年に歿した。祖父儀兵衛は、養子縁組として嘉蔵の長女ふかと結婚し吉野家に入籍していたが、明治三〇年一〇月一三日死亡。父年蔵は、呉服太物商に奉公し、のれんを分けてもらって「綿屋」をいとなんでいた。作蔵の家は、屋号を「吉野屋」とも「綿屋」ともいった。父年蔵は商才があり、日清戦争後同業者と羽二重会社をつくり、蔵も三戸前、人の世話をよくみる人柄を買われて、無筆にもかかわらず町長に推薦された。母こうは、父を助けて棄身に働きながら、一二人の子供をそだてた良妻賢母の女性であった。

明治一五年（一八八二） 五歳

この頃、家業の綿屋の片手間に新聞・雑誌の取次をやっており、作造は番頭について配達をしたこともある。新聞や政治的小冊子などの取次もやり、このようなことが作造を読書好きな少年にしていたともどもあった。

明治一七年（一八八三） 七歳

寺小屋式の古川尋常小学校に入学する。束脩料は酒一升といわれている。長姉しめと机をならべて勉強する。

明治一九年（一八八六） 九歳

四月十日、小学校令公布される。この頃より読書好きの習慣身につく。仙台で発行されていた小学生相手の週刊雑誌『三余之門』を愛読し、この雑誌に作文を投稿する。石井研堂のファンで『小国民』の熱心な愛読者となり投稿する。小学校三・四年生時代には、これらの雑誌のほか『幼年雑誌』『少年園』『日本之少年』を購読し、巖谷小波『こがね丸』、紅葉山人『二人掠助』などを愛読し、かなりの蔵書家であった。文学少年の友人と二人で雑誌をつくったり、下校の途中毎日のように書店に入りびたっていた。

明治二一年（一八八八） 一一歳

高等小学校入学。読書癖ますます加わり『文庫』の愛読者となる。作造は、身体が小さく痩せていて顔色が青く貧血症であったが、人柄が温和で、他人と喧嘩したこともなく模範少年といわれ、

「吉野屋の作さんのように」というのが、子をもつ親の理想とされていた。

明治二五年（一八九二） 一五歳

三月、古川高等小学校を首席で卒業し、卒業生総代として答辞を読む。四月、宮城県尋常中学校の第一回生として入学。古川町としては中学入学第一号で、町会は入学祝として大槻文彦の『言海』を送り、旗を立てて作造を仙台へ送った。初代校長は『言海』の著者大槻文彦。二月一日、養子をむかえていた長姉しめ、二人の子の母として一九歳で歿す。五女りえ後添えとして明治三〇年十一月二十五日、吉野家をつぐ。

明治二六年（一八九三） 一六歳

中学入学後、数学に興味をもち文筆から遠ざかっていたが、一月、数名の友人と雑誌講読会をつくり、新聞を出す。三月、海軍大尉郡司成忠の千島探検に感激し、寄附金を集める。四月、首席として特待生となり月謝免除、卒業まで続く。一月、友人数名と回覧雑誌『常盤文学』をつくり二号まで発行する。

明治二七年（一八九四） 一七歳

二月一日、月刊の回覧雑誌『中』を発行。翌年三月まで続く。編集庶務一切を担当する。八月一日、日清戦争勃発し、興奮する。一月頃、一級下の小山東助『中』グループに加わり吉野との親交

はじまる。この頃、『文庫』『学生筆戦場』に吉野松風琴のペンネームで投稿する。『学生筆戦場』の懸賞文に「月に對して亡き姉を懷ふ」を投稿して一等に當選し、一躍日本の吉野となる。二高在学中の内ヶ崎作三郎、土井晚翠その文才に敬服する。のちの大正デモクラシーの僚友大山郁夫もこの頃、投書少年で『文庫』『学生筆戦場』に投稿する。

明治三二年（一八九五） 一八歳

四月、雑誌『文光』を崑蕪版にて発行する。五月頃、大槻校長を会長に二六〇余名の會員を擁する「如蘭会」を組織し、小山東助と雑誌編集を担当し、『如蘭会雑誌』を発行する。九月、大槻校長辭任し東京に去る。後任の校長湯目補隆となる。この頃より、将来文科の哲学に入り哲学研究をやろうと考える。

明治三二年（一八九六） 一九歳

五月、ドイツ型教育家の湯目校長にたいする憤懣が爆発し、全校生徒の校長更迭陳情デモが行なわれた、吉野も参加する。中学時代の吉野の蔵書は、田舎の本屋ぐらゐの量になる。

明治三〇年（一八九七） 二〇歳

三月、首席で宮城県尋常中学校卒業。九月、仙台の第二高等学校大学予科法科へ無試験入学。小山東助も中学四年より文科へ入学、当時の二高校長沢柳政太郎。国語、作文の教授佐々醒雪の感化を受

け、論文の書き方を覚える。

明治三二年（一八九八） 二一歳

仙台北四番丁自炊寮にあつて中学生を指導し、松下村塾をまねるものと評される。健康に留意する。尚綱女学校長ミス・ブゼルのパブル・クラスに加わり、栗原基、島地雷夢、内ヶ崎作三郎らと親交を結ぶ。文芸部・雑誌部・忠愛之友倶楽部に所属する。四月、特待生となる。七月三日、北一番丁の浸礼教会で中島力三郎牧師より、島地・内ヶ崎とともに浸礼をうけ、キリスト者となる。九月、内ヶ崎の推薦により、小山とともに雑誌部委員となる。一〇月一八日、ユニテリアンを中心とした社会主義研究会（会長村井知志）設立される。この年、元秋田藩士阿部弥吉の長女たまの（当時仙台女子師範学校学生一九才）と仙台組合教会牧師片桐清治の司式により結婚（婚姻届は明治三三年五月一四日）。この年、押川方義、松村介石、海老名弾正らの講演を聞く。

明治三二年（一八九九） 二二歳

二月、二高の廻覧雑誌に「郷那台刻石文を読む」を掲載。七月、佐々醒雪、山口高等学校に去る。この年も雑誌部委員となる。

明治三三年（一九〇〇） 二三歳

一月二八日、社会主義研究会を改め、社会主義協会（会長安部磯

雄) 発足。六月、文芸部演説会で「宗教と哲学」と題し演説する。七月、第二高等学校卒業。七月一日、本郷教会海老名弾正『新人』発刊。九月、東京帝国大学法科大学政治学科(総長菊地大麓、法科大学長穂積八束)に入学する。先輩の内ヶ崎・栗原のいる本郷台町の中央学生基督教青年会館に小山と入る。九月二日、長女信生る。九月三日、東京帝国大学学生基督教青年会の新入生歓迎会に出席する。小石川柳町の浸礼派教会に通う。三沢科『新人』の編集を担当し、内ヶ崎・栗原・小山らとともに協力する。間もなく、内ヶ崎・栗原らと浸礼派教会より本郷教会へ転会、小山は海老名弾正から洗礼をうけともにも本郷教会員となる。やがて『新人』に海老名弾正の演説を速記する。一木喜徳郎の「国法学」講義に心酔する。

明治三四年(一九〇一) 二四歳

一月二〇日、東大学生基督教青年会総会で海老名弾正名誉会員となる。三月、夫人と令嬢出京し、本郷金助町に住む。四月二日、海老名弾正、信条問題で福音同盟協議会から脱会。五月一日、安部磯雄・片山潜・木下尚江ら社会民主党結成。二〇日禁止さる。七月、内ヶ崎・栗原の卒業を記念して、内ヶ崎・栗原・小山を伴って帰省し、古川町瑞川寺にて学生演説会を催す。この演説会の司会をしたのが当時中学生の鈴木文治。九月、欧洲留学より帰国し、衆民主義の立場で新しい政治学を講ずる小野塚喜平次に傾倒する。九月、自由神学をとる海老名弾正(『新人』)と正統主義にたつ植村正久(『福音新報』)との間で翌年七月までキリスト教論争行われる。十一月三〇日、本郷教会の明道会演説会で開会の辞をのべる。

二月、田中正造の鉅毒問題に関心をもち。

明治三五年(一九〇二) 二五歳

二月九日、万国青年会同盟祈祷会で公開演説を行なう。三月八日、東大学生基督教青年会演説会で司会を担当する。九月二十七日、二女明生る。この頃、小山の推めにより文科中島力造教授の「社会倫理」を聴講し、社会主義に興味をもつ。

明治三六年(一九〇三) 二六歳

四月『万朝報』反戦論を展開する。五月一日、小野塚喜平次『政治学大綱』上巻を出版(下巻二月二日出版)。六月二十四日、いわゆる東大七博士の征露強硬論提唱。一〇月九日、東大学生基督教青年会役員内規を起草し、役員会で承認さる。十一月五日、週刊『平民新聞』創刊。この頃、小山の手引によって社会主義協会演説会に出席し、キリスト教社会主義者安部磯雄・木下尚江に傾倒する。

明治三七年(一九〇四) 二七歳

二月一日、日露戦争勃発。三月『新人』の時評に「露国の満州占領の真相」などを翔天生(ペンネーム)で執筆する。三月、穂積陳重教授の「法理学」ゼミとして「ヘーゲルの法律哲学の基礎」を執筆、九月『法学協会雑誌』に掲載さる。五月十五日、東大学生基

督教青年会卒業生送別会に出席、七月、東京帝国大学法科大学政治学科卒業、就職を拒絶して政治史研究のため東京帝国大学大学院に入る。八月、『新人』に「日露戦争と世界政治」を執筆し、戦争そのものの批判をぬきにして、日本の国際的地位の発展が世界政治の理想に一步を進めると論ず。一〇月一日、内ヶ崎・小山とともに『新人』編集記者となる。一〇月七日、東大学生基督教青年会第一回修弁会で演説する。一月六日、新人社講演会において「政治勢力の中心」と題して演説する。二月、『新人』に「選挙権拡張の議」などを執筆し、普選を論ず。二月、東京帝国大学工科大学講師嘱託。この頃、浮田和民の『太陽』に掲載する自由主義に立脚する長文の政論にひきつけられ、自由主義に徹するとともに、社会主義を研究しはじめ、シャフレルの『社会主義大綱』を小山と会読する。安部磯雄、木下尚江に共鳴したが、幸徳秋水・堺利彦らの無神論者に反対する。

明治三八年（一九〇五） 二八歳

一月十五日、本郷教会の会計主任補佐となる。『新人』一月・二月号に吉野作造の署名入りで「本邦立憲政治の現状」を執筆し、民主主義を提唱。一月二十九日、週刊『平民新聞』終刊。一月、『ヘーゲルの法律哲学の基礎』（法理論叢書第二編）出版。二月五日、週刊『直言』、平民新聞の後継紙となる。二月、『新人』社説に「国家魂とは何ぞや」を執筆し、平民社の社会主義を批判する。これに對して、木下尚江が『直言』第二号に「新人の国家宗教」を掲載し反ばくする。この頃、島田三郎らと「朝鮮問題研究会」を組織す

る。四月二日、本郷教会日曜夜説教会で「愛情の発展」と題し説教する。六月四日、本郷教会に東京婦人会の講演あり、講師木下尚江の弁士中止を見て憤慨する。この夏、木下を中心に早稲田大学卒業の大山都夫・永井柳太郎とキリスト教社会主義研究をくだつた。この頃、実家は経済的に苦しく、早稲田大学への就職運動をここみて失敗す。六月二十四日、三女光子生る。一〇月、梅謙次郎・穂積陳重の推めにより、清国直隸総督袁世凱の長子克定の家庭教師として中国行きを決意する。

明治三九年（一九〇六） 二九歳

一月、東京帝国大学工科大学講師を辞任する。一月四日、本郷教会の渡華送別祈禱会に出席。一月十七日、東大学生基督教青年会の送別会に出席する。一月二二日、妻と三女を伴って中国へ出発する。天津到着、給与問題で苦しむ。六月一日、袁世凱と初対面、克定が奉天に赴任すると同行す。九月九日、克定辞職し天津に帰る。克定に法律書を講ず。中国改革意見は徒勞におわる。この年『試験成功法』を瀋陽先生のペンネームで出版。

明治四〇年（一九〇七） 三〇歳

一月九日、青年夜学部で社会主義講話第一回を行なう。三月二五日、北洋督練外翻譯官として参謀将校のため毎日二時間ずつ国際法の講義を行なう。四月より河上肇と文通をはじめめる。六月二十六日、国際法講義を終了。この頃、相変らず克定の勉強の相手となる。八

月二日、四女秀生る。九月、北洋法政専門学堂教習となる。今井嘉幸も教習として中国へくる。中国と日本の改革について今井と語り合う。二月五日、教習を辞す。二月一六日、給与を四百元にする約束で教習に復職する。

明治四一年(一九〇八) 三三歳

七月、京都帝国大学総長岡田良平の招きにより二年半ぶりに家族とともに帰国。岡田京大総長より、京大助教として行政法担当の就任を望まる。穂積陳重の怒りにあって、九月、再び天津にもどる。

明治四二年(一九〇九) 三三歳

一月、袁世凱の下野を好機として中国より帰国する。小石川林町の借家に落着く。一月三十一日、東大学生基督教青年会の帰国兼助教授就任歓迎会に出席。二月五日、東京帝国大学法科大学助教に任ぜられ、政治史担当。四月一日、本郷教会新人社『新女界』を創刊、五月、『新女界』に「家庭における修養」を執筆する。九月二日、五女敬生る。

明治四三年(一九一〇) 三三歳

一月二〇日、政治史及び政治学研究のため、満三年間、ドイツ、イギリス、アメリカへ留学仰付けられる。一月二四日、作造の弟信

次、作造の妻たまのの妹阿部きよみと結婚。二月九日、東大学生基督教青年会の渡欧送別会に出席。三月三〇日、出発。一年五百円三年間千五百円を後藤新平より援助さる。五月、大逆事件おこる。六月一日、マルセイユ着。ハイデルベルヒ大学聴講、その大学と大学教授に敬意を表さず。

明治四四年(一九一一) 三四歳

六月二三日、ドイツからオーストリアのウィーンへ向う。労働党の一大示威運動の立派さにおどろく。九月、内ヶ崎作三郎「東京ユニテリアン教会」の牧師となる。九月二六日、ベルリンへ到着。牧野英一・佐々木惣一らと交遊。宗教、社会主義を研究す。十一月五日、高田耕安に肺にくもりありと診断さる。十二月一日、長姉しめの忌日に不幸を回想する。

明治四五年(一九一二) 三五歳

一月、「東京ユニテリアン教会」は「統一基督教会」と改称し、小山東助・鈴木文治ら本郷教会より転会する。一月、ドイツの総選挙でドイツ社会民主党、全投票数の三分の一の二〇議席かくとくする。四月三日、ベルリンを去り、四月一五日、ウールツブルグ着、四月二九日、シュトラスブルグ着、六月八日、フランスのナンシーに到着。フランス語を練習。七月四日、「受洗一年をかえりみて、学少しく進み、信仰さらに進まず」となげく。七月三〇日、明治天皇逝去、大正と改元。七月三十一日、パリへ向う。八月一日、

鈴木文治「友愛会」設立。八月、ジュネーヴの万国議員大会參觀。日本代表は明治天皇逝去のため不参加。風光明媚のスイスの旅行をたのしむ。イタリー旅行は友人に旅費を都合してやったため実現せず。その後パリでフランスの普通選挙の沿革などを調査する。

大正二年（一九一三） 三六歳

一月二九日、パリを發つてセダンを經てルクセンブルグから二月一日、再びベルリン着。三月八日、ベルギーのブラッセル着。三月一三日、オスタントからドーバー海峡をわたつてロンドン到着。三月二九日、牧野英一とともにイギリス議會を見学。イギリスで上院権限縮小問題を学ぶ。五月二八日、ロンドンを發つて、六月五日、ニューヨークへ到着。北太平洋鉄道を横断して、六月一七日、シアトルから乗船。アメリカで「排日」の氣運を見る。七月三日、海外留学より帰国、横浜着。三年間の留学を通じて、第一に労働問題、第二に經濟問題、第三に社會問題、第四に人種問題、第五に政治問題に関心をもつた。七月一六日、東京帝國大学法科大学政治史講座担任を命ぜられる。九月、明治大学講師を囑託さる。九月二〇日、東大学生基督教青年会、新入会員および吉野助教歓迎會に出席する。十一月一日、青年會の例會で、ユニテリアン同盟の問題の如きは、内部からこれを改めるべしと説く。十一月、『中央公論』主筆滝田樗陰の訪問をうく。

大正三年（一九一四） 三七歳

一月、『中央公論』にはじめて「學術より觀たる日米問題」を執筆。海軍シーメンス事件おこる。二月二九日、安中教會青年會主催の講演會で、ドイツ農村の實況をのべ日本農村の參考となることを語る。夜の演說會で「現事政局の側面觀」と題して演說し、湯淺治郎・柏木義円との交友はじまる。三月、『中央公論』に「民衆的示威運動を論ず」を執筆し論壇の注目をうく。三月二四日、山本権兵衛内閣総辭職。四月一六日、第二次大隈重信内閣成立。五月、友愛會評議員となる。七月二三日～一八日、三田統一教會の基督教同志會夏期學校で、「現代政治問題概説」と題して講義する。七月一七日、東京帝國大学法科大学教授に任ぜられ、政治史講座担任を命ぜられる。この頃、本郷区千駄木町の自宅周辺に、東大学生基督教青年會のメンバーが下宿し、吉野學校の觀を呈す。七月二八日、第一次世界大戦勃發。八月八日、対独宣戰布告。十月二二日、長男俊造生る。十一月一六日、東大学生基督教青年會法科信交會に出席。

大正四年（一九一五） 三八歳

一月、『中央公論』に論策四篇をかかげ、以後數年間この關係づく。二月二四日、安中・原市兩教會青年會主催の講演會が碓氷會堂で行なわれ、「時局論」について講演。夜、原市會堂で「総選挙論」と題して講演する。三月、第一二回総選挙に小山東助立候補しその選挙参謀をつとめ、小山当選する。三月二九日、神戸女学院卒業式において「戦後の婦人問題」と題して講演する。六月一日、一戸直藏・中沢臨川・佐々木惣一らと大学普及會を組織し、

『国民講壇』を発行(第六号大正四年九月一日で廃刊)し、「欧米に於ける憲政の発達及現状」の論文で、はじめて「民本主義」という言葉を使う。六月、『日支交渉論』を出版。七月二二日〜二四日、御殿場で開催されたYMCA夏期学校で「政治と宗教」について講義する。八月、『欧洲動乱史論』を出版。九月八日、法学博士の学位を受く。九月二八日、東大学生基督教青年会の新入会員歓迎会及び吉野教授博士号授与祝賀会に出席し、先般の地方選挙における加藤同志会総理や原政友会総理の遊説は、心ある者に迎えられないから我等の時代来ると力説する。十一月、『現代の政治』を出版。十二月、徳富猪一郎監修・吉野作造編集の民友社現代叢書『南洋』を出版、以後大正五年一月まで毎月一冊づつ『欧洲大戦』『極東の外交』『婦人問題』『現代米國』『独逸軍国主義』『最新科学』『満蒙』『新聞』『近時の経済問題』『新芸術』『極東の民族』計一二冊出版。

大正五年(一九一六) 三九歳

一月、『中央公論』に代表論文「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」を発表し、民本主義を提唱。上杉慎吉・植原悦二郎・室伏高信・茅原華山らの批評集中し、一躍論壇の寵児となる。これらの反批判として『中央公論』四月号に「予の憲政論の批評を読む」を執筆。三月末から四月、三週間にわたって、知名の士として朝鮮・満州に招かれる。五月、『欧洲戦局の現在及将来』を出版。六月、『中央公論』に「満韓を視察して」を発表し、朝鮮統

治批判、武断政治批判を論ず。同じ号に「吉野作造論」集団人物評論としてとりあげられる。竣工した東大学生基督教青年会館で大学公開講座がおこなわれ、新渡戸稲造・阿部次郎らと特別講義を行なう。六月五日、東大学生基督教青年会憲法草案を起草する。九月、早稲田大学講師を嘱託する。九月三日、東大学生基督教青年会新入会員歓迎会で歓迎の辞をのべる。一〇月九日、寺内正毅内閣成立。一〇月一八日、東大学生基督教青年会学生招待会で「近世史の中に流れるキリスト教」を講演する。十一月、『中央公論』に「寺内々閣の出現に関する厳正批判」をかかげる。十一月二四日、六女文子生る。

大正六年(一九一七) 四〇歳

一月、吉野門下生の、星島二郎・古市春彦・山本龜市ら『大学評論』を発行し、大学普及運動を展開。『大学評論』に「公共的犠牲の公平なる分配」を執筆する。二月五日、朝鮮・支那学生有志との懇談会を発起し、東大学生基督教青年会で行なう。二月中旬、小山東助第一三回総選挙に立候補、応援演説のため宮城県下を遊説する。三月一四日、東大学生基督教青年会理事長に就任。青年会特別会員晩餐懇談会で「戦争に対するキリスト教の態度」を論ず。三月一五日、ロシア二月革命。四月、『中央公論』に「露西亜革命」その他を論ず。三月二八日、大学評論社主催、大学普及講演会で「民本主義と政権の運用」について講演す。四月一五日、大阪福島座の本井嘉幸政見発表演説会で「歐洲大戦と平和政治」と題して熱弁を



ふる。四月二〇日、第一三回総選挙に小山東助・今井嘉幸当选する。五月一九日、戸籍名の作威を作造と改名届出る。六月、『支那革命小史』を出版。九月、『戦前の歐洲』を出版。一〇月、早稲田騒動で大山郁夫、早稲田大学を辞任し、『朝日新聞』に入社。吉野は「大山が辞めるなら俺も辞める」と早稲田大学講師を辞任する。一〇月、『大学評論』に「民本主義と団体問題」を執筆。十一月七日、ロシア一〇月革命。

大正七年（一九一八） 四一歳

一月、『中央公論』に「民本主義の意義を説いて再び憲政有終の美を済すの途を論ず」をかかぐ。一月二六日、名古屋中央教会で「民本主義に就いて」講演。一月二七日、名古屋市会議事堂で「支那問題に就いて」講演。二月二七日、三月六日、一三日、二〇日の四回にわたり、東大学生基督教青年会科外講演会で「社会主義のあやまりと社会主義についてのあやまり」と題して講演する。三月二四日、東大学生基督教青年会河田茂ら有志の発起により、賛育会設立、理事となる。三月、シベリア出兵交渉開始。四月、『中央公論』に「所謂出兵論に何の合理的根拠ありや」をかかげる。四月、山川均「無名氏」のペンネームで『新日本』に「デモクラシーの煩悶」を執筆し吉野の民本主義を批判。六月一七日〜一九日、同志社大学科外講演で「日本と米國」を講演する。七月二三日〜三十一日、御殿場東山荘のY.M.C.A.夏期学校で「世界的覚醒と國民的覚醒」について講義する。八月二日、シベリア出兵宣言、八月三日、米騒動

おこる。八月四日、内務大臣、米騒動に關する一切の記事差止めを命令。八月二五日、『大阪朝日』の白虹事件。九月二八日、黒竜会・浪人会の『大阪朝日』襲撃。九月二九日、原敬内閣成立。一〇月一五日、『大阪朝日』筆禍事件の波紋により、鳥居素川・長谷川如是閑ついで、大山郁夫・花田大五郎・丸山幹治など退社。一〇月二七日、緑会弁論部長として東大・京大連合演説会に東大学生、赤松克麿・宮崎竜介などを引率して出席。帰京後、吉野を中心として普選研究会を組織し、新人会結成のきっかけをつくる。十一月、『中央公論』に「言論自由の社会的圧迫を排す」と題して、浪人會を批判する。十一月、東大学生基督教青年会内に吉野の門下生片山哲・星島二郎・山本龜市を中心として法律相談所を開設。十一月二三日、神田南明俱樂部で浪人會との立会演説会。吉野の勝利に帰す。十二月、麻生久・赤松克麿・宮崎竜介を中心として、東大内に新人会結成さる。十二月二三日、吉野・福田徳三ら黎明會を組織する。十二月二六・二七日、名古屋市教育會主催の思想問題講習會で「民本思想の大綱」と題し講演する。

大正八年（一九一九） 四二歳

一月、河上肇『社会問題研究』発刊。一月八日、神田青年會館で黎明會第一回講演会において、開會の辞をのべ黎明會の三大綱領を解説し、黎明運動の意義を説く。二月、大山郁夫・長谷川如是閑ら「我等」発刊。「我等」創刊号に「我國憲政の回顧と前途」を執筆。『中央公論』に「選挙権拡張問題」をかかげ民本主義の実質化

を提唱する。二月一日、新人会主催により学生普選要求デモ行われる。二月十七日、同志社大学で「デモクラシーと我団体」と題し科外講演を行なう。二月二十六日、神田青年会館における黎明会第二回講演会で「デモクラシーに対する我党の見解」と題して、福田徳三との理想上の異同をのべる。二月二十七日、新人会の茶話会に出席する。三月、『黎明講演集』発刊、新人会機関誌『デモクラシー』発刊。三月一日、朝鮮各地に独立運動おこる(万歳事件)。三月二三日、神田青年会館における黎明会第三回講演会で、開会の辞に於て「先づ自己を批判せよ」と朝鮮問題を中心とする反日的外交問題にふれる。四月、堺利彦・山川均の『社会主義研究』発刊。『改造』発刊。四月一日、東京帝国大学経済学部政治史授業担任を命ぜられる。四月一日～七日、日本統一基督教弘道会の自由基督教講習会で「帝国主義より民主主義」について講演する。四月二日～五日、東大学生基督教青年会で「第二回全国基督教青年会大会」が開かれ、吉野は政治問題を専門として協議会を行なう。四月九・一四・二二日の三日間、吉野・牧野英一主催で沖野岩三郎牧師を呼び「紀州新宮社会主義者の閥歴、其他に就いて」の談話会を行なう。四月三〇日、神田青年会館における黎明会第四回講演会で「支那問題に就いて」と題し講演する。四月、『中央公論』に「普通選挙の理論的根拠」をかかぐ。『普通選挙論』を出版する。五月三日、名古屋市会議事堂で名古屋市清話会主催の講演会において「日米問題」と題して講演。五月四日、大阪中央公会堂において大阪毎日新聞社主催の黎明会大講演会が開かれ「山東問題」について講演する。五月一日、新人会で、福田徳三・官崎滔天らと講演。六月、

『解放』発刊。『中央公論』に「民本主義、社会主義、過激主義」を執筆。六月五日、神田青年会館における黎明会第五回講演会で「日支相互の諒解」と題して講演。六月二十四日、黎明会第六回講演会で「朝鮮統治に関する最少限度の四要求」と題して講演する。七月一三日、麻生久とともに月島の労働者を訪問。七月二三日～三日、御殿場東山荘のYMCA夏期学校で「国防第一の誤想と二頭政府」について講義する。八月一日、同志社大学講師に囑託さる。八月二四日、親友の小山東助逝去する。八月三〇日、友愛会第七周年大会、大日本労働総同盟友愛会と改称。八月三十一日、友愛会主催の労働問題演説会で「国際労働会議に就いて」と題し、労働運動の理想を熱心に説く。九月二六日、父年歳(七十二歳)逝去。九月一日、東京帝国大学法学部政治学講座兼任を命ぜられる。一〇月六日、同志社大学で「国家生活に於ける宗教の使命」と題し、科外講演を行なう。一月九日、本郷教会伝道会で講演する。一月二〇日、新人会一周年記念園遊会に出席する。二月八日、新人会主催の帝国教育会館における学術講演会で「改造の理想」と題して講演する。二月十五日、有限責任家庭購買組合設立、その理事長となる。二月二十七日、東京帝国大学法学部政治学講座兼任を免じ、分担任を命ぜらる。

#### 大正九年(一九二〇) 四三歳

一月一三日、森戸辰男筆禍事件。一月三〇日、森戸事件の特別弁護人として東京地裁に出廷し、佐々木惣一・三宅雪嶺・安部磯雄・

高野岩三郎らと弁護を行なう。二月一〇日、黎明会の「研究及発表の自由」講演会で「危険思想の弁」と題して講演。二月、『我等』

に「言論自由と国家の干渉」執筆。三月、『国家学会雑誌』に「東洋に於けるアナキズム」をかかぐ。五月一〇日、有島武郎・森本厚吉と文化生活研究会を組織し、『文化生活研究』を発刊。「政治に及ぼす婦人の力」を連載する。五月一日、新人会主催の北京大學生歓迎晩餐会の席にて、改造の氣運は世界の主潮であると感想をのべる。六月四日、東京帝国大学法学部政治学講座分担を免ぜらる。六月三日、築地精養軒における文化生活研究会披露会で挨拶をのべる。七月一日、経済学部政治史兼任を免ぜらる。七月十四日～一六日、『大阪朝日』に「普選の根本義」を掲載。七月二日～二九日、御殿場東山荘のYMCA夏期学校で「社会問題とキリスト教」について講義する。七月、新人会第一回講演集『民衆文化の基調』（樺田民蔵・大山郁夫・森戸辰男・吉野作造）出版。九月一日、農学部政治学担任を命ぜらる。九月一六日、本郷教会学生歓迎集会で大山郁夫とともに講演する。九月一八日、東京青年会館における文化生活研究会講演会で講演する。十一月、文化生活研究会講演会に有島武郎・森本厚吉と、大阪・神戸・京都に赴き、六日、大阪中之島公会堂で「日本の政治家のあたま」、七日、神戸親和高等女学校で「誤られたる本分論」、七日夜、京都基督教青年会で「社会主義の新旧二派」と題し講演する。十一月、『社会改造運動に於ける新人の使命』を出版。十二月九日、大杉栄・堺利彦ら日本社会主義同盟を創立。この年、駒込神明町に自宅を新築する。

大正一〇年（一九二一） 四四歳

一月、『中央公論』に「現代通有の誤れる国家観を正す」を執筆。二月、『第三革命後の支那』を出版。四月四日、横浜市記念館における文化生活研究会講演会で「ユダヤ人の世界顛覆の陰謀説に就いて」を講演。四月五日、東京帝国大学経済学部政治史担任を命ぜらる。四月一〇日、仙台市仙台座における文化生活研究会講演会で「世界的秘密結社の正体」と題して講演。四月二六日、京都市公会堂における大阪朝日新聞主催の政界革新党弊打破大演説会で「党弊甚し」と題して講演。同日、同志社大学で「猶太人の世界顛覆陰謀説に就いて」と題して科外講演を行なう。五月、『私どもの主張』（吉野作造・有島武郎・森本厚吉）出版。五月一日、東京大学における公開演説会で「思想家の誘惑」と題し演説する。五月二四日、神田明治会館で中央法律新報社主催の「法律の社会化」講演会で「法律に対する世俗の考」と題し講演。六月一日、文化生活研究会より『文化生活』発刊「志国の予言」鄭鑑録」を掲載し、以後毎号にわたり執筆する。七月六日～二五日、御殿場東山荘のYMCA夏期学校で「昨今の問題」について講義する。八月三日、松山の夏期学校で講演する。帰途、神戸の三菱・川崎造船所労働争議に立ち寄る。その後、盛岡に向い講演。九月一七日、尾崎行雄らと軍備縮少同志会を結成する。一〇月、『中央公論』に「軍備縮少の徹底的主張」をかかぐ。十一月二日、ワシントン会議開催。

大正一一年（一九二二） 四五歳

一月、『中央公論』に「社会改造の必要と人類愛の高唱」執筆。  
 二月一三日、一九日、『東京朝日』に「所謂帷幄上奏に就て」を連載し軍部を攻撃。三月、『改造』に「帷幄上奏論の主要なる論点」をかかぐ。三月、二女明子、赤松克麿と結婚。三月、過激社会運動取締法案提出。四月四日、九日、北京で開催された第一〇回WSCF(世界学生基督教連盟)総会に井深樞之助・斎藤愼一・湯浅恭三らと日本代表として出席。五月九日、東大学生基督教青年会の学生招待会にて講演する。五月一日、願により東京帝国大学農学部政治学担任を免ぜらる。五月、『中央公論』に「青年将校の見た西比利亜出兵軍の実状」を執筆。七月一日、日本共産党結成非合法。九月中旬、文化生活研究会主催の文化講演会に北海道地方を遊説。「政界革新の真目標」(小樽)、「日本新文化の建設」(札幌)、「社会問題の文化的意義」(旭川)、「新日本の政治問題」(岩見沢)、「社会奉任の現代的意義」(室蘭)、「日本に於ける国際思想の発達」(函館)について講演する。九月、『二重政府と帷幄上奏』を出版。一〇月、東京にて文化生活研究会主催の講演会で「私の新英雄主義」と題して講演する。一〇月、『支那革命史』(加藤繁と共著)を出版。

大正一二年(一九二三) 四六歳

二月二十六日、東大法理研究会で「ローマ法王の国際法上の地位」を発表。三月、『中央公論』に「解放運動と政治運動」執筆。四月二十六日、叙勲四等授瑞宝章。五月、財団法人文化普及会の評議員と

なる(理事長森本厚吉)。五月一日、東大学生基督教青年会の学生招待会で講演する。五月一日、早稲田大学軍事研究団結成式。六月、日本共産党検査。早大不当臨検。七月、『中央公論』に「学園の自由と臨検検査」をかかぐ。八月十二日、『大阪朝日』主催の高野山夏期大学で「支那問題を中心として」を講義する。九月一日、関東大震災おこり東大に保管されていた吉野の珍書稀書焼失す。朝鮮人、社会主義者の虐殺。九月十六日、大杉栄、憲兵大尉甘粕正彦によって虐殺さる。一〇月一日、改造社主催の二三日会で大杉事件の対策をねる。一月一日、『東京朝日』に「甘粕大尉滅刑運動」をかかげこれを攻撃する。一〇月、『中央公論』に「前古未曾有の大震災を弔ふ」を執筆。一二月、『中央公論』に「軍事官憲の社会的思想戦への干入」「朝鮮人虐殺事件に就いて」を論ずる。一二月二十七日、虎の門事件により第二次山本権兵衛内閣瓦解。

大正一三年(一九二四) 四七歳

一月、『中央公論』に「貴族院改革論」を執筆。一月一日、『大阪朝日』に「改造問題の側面観(貴族院改造問題)」をかかぐ。一月七日、清浦奎吾内閣成立。二月七日、朝日新聞社入社。二月八日、願により、東京帝国大学法学部教授を免ぜらる。二月二十二日、『大阪朝日』主催の時局問題大演説会が中之島公会堂で開催され、「護憲運動批判」と題し演説。二月二十三日、同じく京都公会堂で「最近の政局に現われたる謬想」と題して演説。二月二十五日、同じく神戸青年会館で「現代政局の史的背景」と題して演説。この演説

がいわゆる「五カ条のご誓文事件」として、朝日新聞社追放の主因となる。この三回の時局講演は、三月、『時局問題批判』として朝日新聞社より出版。三月一日、叙従四位、特旨をもって位一級被進。三月五日、東京帝国大学法学部講師嘱託。三月二十八日、四月三日、『大阪朝日』に「枢府と内閣」を連載。これも筆禍の一因となる。五月、『大正大震災災誌』に「労働運動者及社会主義者庄迫事件」を掲載、同じく執筆した「朝鮮人虐殺事件」は、検閲により全文削除される。五月、筆禍事件につき同僚・先輩・後輩の宥免運動あり不起訴なる。五月二十九日、朝日新聞社退社。東大で研究室をもつ講師となる。六月一日、護憲三派の加藤高明内閣成立。六月、吉野作造編『島田三郎全集』第一巻出版。以後、大正一四年一月までに第五巻出版さる。七月、『新井白石とヨワン・シローテ』を出版。九月、『露国帰還の漂流民幸太夫』を出版。十一月、明治文化研究会創立。十一月、『かく信じ斯くかたる』を出版。十一月四日、横浜で沼南会主催の島田三郎追憶演説会に出席し演説する。

大正一四年（一九二五） 四八歳

一月一〇日、肋膜炎のため大学病院入院。四月二日、治安維持法公布。五月五日、普通選挙法公布。六月末、退院し葉山海岸で転地保養する。明治文化研究に没頭。一〇月、『中央公論』に「普通と政治教育」を執筆。明治文化研究会に茶話会を設けて、東大学生基督教青年会の一部屋を研究と懇談の場として以後継続する。十二月一日、農民労働党結成。即日禁止。一二月、『公人の常識』を出版。

大正一五年（一九二六） 四九歳

一月、『中央公論』に「近く開かるべき軍縮大会議」を執筆。一月、『新旧時代』に「明治文化の研究に志せし動機」を掲載。一月四日、文化普及会の文化アパートメントがお茶の水に開館し、その披露会で挨拶をのべる。一月、『現代政治講話』を出版。一月五日、京都学連事件おこる。一月三〇日、加藤首相死去し若槻礼次郎内閣成立。三月五日、労働農民党結成。四月、『中央公論』に「労働農民党への希望」を執筆。五月一三日、東大学生基督教青年会新館開館式で挨拶をのべる。五月十五日、東大学生基督教青年会新館開館記念講演会で講演する。九月一〇日、財団法人賛育会理事長に就任。一〇月、三女光子小松清と結婚。一〇月、『中央公論』に「学生大検挙に絡まる諸問題」、「議會制度の本当の運命」など執筆。十一月、安部磯雄・堀江帰一らと社会民衆党の結成の産婆役をつとむ。十一月、『問題と解決』を出版。一二月五日、社会民衆党結成さる。一二月二五日、大正天皇死去。

昭和二年（一九二七） 五〇歳

一月、有限責任信用組合相互銀行（組合長星島二郎）の理事となる。二月、『中央公論』に「無産政党の辿るべき道」を執筆。三月、『無産政党の辿るべき道』を出版。三月、『古い政治の新しい観方』を出版。四月二〇日、田中義一内閣成立。四月、青年将校と赤松克麿らの最初の提携。四月、女子文化高等学校の講師となり

「政治概論」「時事及思想問題」を担当する。五月二十八日、山東出兵。五月『講学余談』を出版。六月一日、藤井悌らと超党的な雑誌発刊を計画する。六月、『中央公論』に「枢密院と内閣」を執筆。七月『中央公論』に「支那出兵に就て」をかかぐ。八月、『中央公論』に「対支出兵問題」を執筆。一〇月、東大総長古在由直の思想顧問として待遇される。一〇月五日、吉野作造編集の『明治文化全集』二四巻の第一回配本である第一四巻出版さる。一〇月十五日、藤井悌と雑誌『社会運動』を創刊。「田中内閣の満蒙政策に対する疑義」を掲載する。一二月、小野塚教授在職二五周年記念論文集『政治学研究』を編集し、その第二巻に「我国近代史に於ける政治意識の発生」を執筆する。

昭和三年(一九二八) 五一歳

一月二五日、東大で新人会对七生社の乱闘事件発生。二月四日、総長にかわって学生への告示を作成し発表す。二月二〇日、普選による最初の選挙。かつての僚友大山都夫労働党より香川県で立候補、大弾圧をうけて落選する。三月、『中央公論』に「無産政党内の好機運」を執筆。三月一五日、三・一五事件で共産党員大弾圧。四月、労働党・評議会・新人会等に解散命令。五月、『中央公論』に「共産党検査と労働党解散事件」を執筆。六月四日、張作霖爆殺(満州某重大事件)。六月一四日、本郷教会理事となる。六月二九日、治安維持法改悪。八月、『中央公論』社長交替。島中雄作社長となり吉野顧問格となる。一〇月、『社会経済体系』第二〇巻に「明治外交史の一節」を執筆。十一月二四日、『中央公論』の会

に出席。一月二七日、『中央公論』の時局への改革案協議し、以後毎月二七日会はじまる。二月、『中央公論』にはじめて「民主主義」の文字を用いて「現代政治上の重要点」を執筆する。

昭和四年(一九二九) 五二歳

二月、『中央公論』に「現代政局の展望」を執筆。三月五日、山本宣治暗殺さる。四月、『中央公論』に「山本宣治の惨死」を執筆。四月二六日、四・一六事件で共産党員大検査。七月二日、浜口雄幸内閣成立。八月、『日本無産政党史』を出版。一〇月、『中央公論』に「民権運動弾圧側面史」を執筆。一二月、『中央公論』に「憲法と憲政の矛盾」を執筆。十二月、『近代政治の根本問題』を出版。

昭和五年(一九三〇) 五三歳

一月二一日、ロンドン海軍軍縮会議開かる。二月、『現代憲政の運用』を出版。四月、『現代政局の展望』を出版。四月二二日、ロンドン海軍軍縮会議で日英米三国条約調印。ついで政府の回訓をめぐり統帥権干犯問題おこる。六月、『中公論』に「統帥権問題の正体」を執筆。七月、『中央公論』に「統帥権の独立と帷幄上奏」を執筆。七月二〇日、全国大衆党結成(委員長麻生久)。七月二五日、数年にわたる明治文化研究の集大成である吉野作造編集の『明治文化全集』二四巻の最終配本である第二三巻出版さる。九月、陸軍中佐橋本欣五郎を中心として桜会結成。十一月一四日、浜口雄幸

首相狙撃され重傷。二三月、『対支問題』を出版。

昭和六年（一九三二） 五四歳

一月、『中央公論』は「マルキシズム簡易講座」を特集する。三月、青年将校の陰謀、三月事件発覚。三月二十九日から四月五日まで『東京朝日』に「議会浄化の根本問題」を連載。四月二四日、第二次若槻礼次郎内閣成立。六月、『中央公論』は「日本フテシズム論」を特集する。九月一八日、満州事変突発。九月、『講演』に掲載された赤松克麿の「ナショナリズムとソシヤリズム」をメモで批判する。一〇月二七日、青年将校の陰謀、十月事件発覚。一二月一三日、犬養毅内閣成立。この年、洋々学人のペンネームで『答案の書き方』を出版。

昭和七年（一九三三） 五五歳

一月、『中央公論』に伏字のはじまる「民族と階級と戦争」を執筆。一月一九日、社会民衆党の赤松克麿らフアシズム化する。一月、吉野の「第三勢力論」生まる。一月二八日、第二次上海事変おこる。二月九日、血盟団事件。二月、大山郁夫アメリカへ亡命する。三月、『婦人公論』に「現代政治の分析」を執筆。『国家学会雑誌』に「国民社会主義運動の史的検討」を執筆。三月一日、満州成立。五月二五日、犬養首相射殺さる。五・一五事件。六月六日、六女の文字、新派に入り女優としてデビューする。八月二七日、二七日会に出席。清沢列の帰朝歓迎会。一二月四日、木曜クラブ発会

式。創立委員長にかつがる。

昭和八年（一九三三） 五六歳

一月一八日、賛育会病院に入院する。二月二八日、逗子小坪の湘南サナトリウム病院へ転ずることに決定。三月五日、その夜近くの病室から発火。三月一八日、午後九時三〇分死去。三月二一日、青山学院大学講堂で巣鴨教会牧師野口末彦司会のもとにキリスト教式で告別式おこなわる。牧野英一が履歴朗読をし、海老名弾正・安部磯雄が告別の辞をのべる。四月一日、東大学生基督教青年会で、吉野先生追悼の夕〆ひられる。五月七日、本郷教会で、吉野博士追悼講演会開催、安部磯雄・内ヶ崎作三郎・相原一郎介・藤田逸男ら講演する。

付記 吉野作造研究の基礎的作業の一つとして年譜を作成したものであるが、講演・演説については、洩れているものが多分にあると思う。とくに大学・高等学校あるいは組合系教会で行なったもので、ご存知の方があればご教示をいただき、今後できるだけ補完していきたい。